

『魔女への鉄槌』第2部問2

多文化共生研究所所員 野村仁子

中世後期、ルネサンスが花開いた時代、『魔女への鉄槌』(以下『鉄槌』と略記)が出版された。当時導入されたばかりの活版印刷を用い、魔女全書として多くの版²を重ねた。著者³は魔女に対し異常ともいえる憎悪を持ち、その終末論的な考え⁴と宗教的熱意から魔女の殲滅は急務であると考えた。しかし、当時魔女が魔術を使ってこの世を滅ぼそうとしているという考えは少数派であり、聖職者や権力者たちは魔女がそのような力を持っていることに対し懐疑的な立場を取ることが多かった⁵。

『鉄槌』第1部⁶における主要なテーマは、魔女及び魔術の实在、悪魔と魔女の協力、神の許可の3つである。昨年度の論文において魔女及び魔術の实在をどのように論証したのかを第1部問1の翻訳によって明らかにした。この問1では、魔女や魔術が現実存在していることを様々な権威⁷を通し証明しており、それにより、魔女は神学的に悪であり、魔術を使いこの世に害悪をもたらすと結論付けている。

さて、問1で魔女及び魔術がこの世に実在することは証明されたが、ではその魔術はどのように引き起こされるのか。魔女が何らかの方法で超自然的な力を手に入れることで引き起こされ

¹ テキストとしては、Christopher S.Mackay, *MALLEUS MALEFICARUM, volume I, The Latin Text and Introduction*, Cambridge, 2006, Christopher S.Mackay, *MALLEUS MALEFICARUM, volume II, The English Translation*, Cambridge, 2006, Wolfgang Behringer, *Heinrich Kramer (Institoris). Der Hexenhammer. Malleus Maleficaru.*, Munchen, 2000.を使用した。

出版されてから1487年のイースターの頃までこの作品は、' *Malleus Maleficarum* 'ではなく' *tractat wider die Zaubernisse* ' (魔術に対する論文) ' *tractat wider die zauberein* ' (魔女に対する論文) ' *tractat Meister heinrichs* ' (ハインリヒの論文) と様々な名前と呼ばれていた。教皇教書、弁明書、ケルン大学の認定書が付された完成版が出版されるのは1491年である。

² 平野隆文、『魔女の法廷—ルネサンスデモのロジーへの誘い—』、岩波書店、2004年、31頁。C.S.Mackay, *op.,cit.*, pp.7-16.

³ 『鉄槌』がハインリヒ・クラーメルの単著なのかヤーコプ・シュプレングエルとの共著なのかについては今日もまだ議論されている。しかし本論では、クラーメルの単著であったという見解を採用し論を進めていくこととする。議論の詳細については、Christopher, S.Mackay, *op.,cit.*, pp.81-102. Wolfgang, Behringer, *op.,cit.*, pp. 37-40.を参照。

⁴ ハインリヒ・クラーメルの終末観は序文に相当する「弁明書」(apologia)に見ることができる。「弁明書」は本論の最後に付した。

⁵ 聖職者にとって超自然的な力とは神や聖人が有しているものであったし、また民衆にとって魔女とは、薬草に通じている者、占いをする者であり、その行為が失敗に終われば罰せられたり私刑を受けたりしたが、近世初期の魔女裁判期のような「魔女は悪の中の悪である」という考えは持っていなかった。

⁶ 『鉄槌』は3部構成である。第1部;魔女が如何に悪であるかの神学的論証。第2部;魔女が行う魔術とその対抗策。第3部;裁判方法。

⁷ 聖書や教父・神学者からの引用を多く用いている。その中でもトマス・アクイナスからの引用が最も多く引用されている。

ているのか、もしくは何か(誰かが)魔女に力を与えているのか。これらのことが続く問2で問題提起されている。先述の通り、この著作の目的はこの世から魔女を撲滅することである。そのための最も有効な手段は、魔女と悪魔⁸を結びつけ魔女を「異端者」「背徳者」に仕立て上げることである。『鉄槌』に先立つ15世紀前半、教皇エウゲニウス4世⁹はクラーメルの主張と同様の書簡¹⁰を出している。しかし先述したように当時から「魔術は妄想の中で起きている出来事である」、「魔術に傾倒する者には罰ではなく指導が必要である」、「悪魔が魔女に力を貸すことはない」と主張する者が多くいた¹¹。しかしハインリヒ・クラーメルはそのような主張に、第1部問2において魔女は悪魔と結託し魔術を引き起こすと反駁している。この反駁を通して著者は「悪魔と魔女の結託」は正当な主張であり、神学的根拠に則ったものであるとし、魔女を、無知で哀れな女性から「悪魔の協力者」の地位へと引き上げた。

また問2では途中「邪視」¹²について多くの箇所を割いて説明している。「悪魔との結託」から話は少し逸れるが、当時目には不思議な力があると信じられており、とりわけ魔女は邪視の持ち主であると信じられていた。

翻訳(【】は訳者による補足)

第1部

⁸ クラーメルの悪魔観はキリスト教の伝統に則ったものであり、ディオニシウスの言葉を借りて説明している。(Dionysius Aeropagita, *De divinis nominibus*, 4,23.)

「悪魔は、自惚れや妬みそして怒りといった精神的な罪、また底なしの凶暴さや際限のない欲求や空想を備えている。また元は天使であった悪魔は、理論的に考えることはできるが、直観によってしか行動しない。しかしながら馬鹿馬鹿しい事においては抜け目がなく、害を与えることに貪欲であり、常に欺瞞を考え、眠っている者を夢によって休ませず、人を病気にし、嵐を起こし、光の天使の姿に自らを変え、常に地獄を携えている。さらに悪魔は、善良な者を支配するために常に彼らを悩まし、人間の終わりを待ち構えている。そして天からの墮落以降、教会の統一を分離させ、隣人愛を侮辱し、聖人の活動にその妬み故に害を与えようとし、あらゆる方法で人間を滅ぼそうとしている。悪魔の力は腰やヘソにある。何故なら、人間は性的快楽によって支配されることが多いからである。」(『鉄槌』第1部問3)

⁹ エウゲニウス4世(1383年—1447年、在位1431—1447)。バーゼル公会議の際の教皇。

¹⁰ 「悪魔はキリスト教徒に魔法をかける、それは彼らを悪魔たちの生贄にし、崇拜させ、臣従の誓いをさせるためである。それは、書かれた契約や、その他の契約を結ぶことによって行われる。契約を結んだ者は、あらゆる悪事や魔術を行うだろう。」これに付け加え、教皇は異端審問官は必要ならば世俗や教会の助力を得て、このような悪魔の共犯者を起訴し、罰するべきであると述べた。教皇は、このようなセクトの危険さと同時にその新しさを示唆している。このような者は伝統的な異端ではなく、伝統的な魔術を使っているのではない。そうではなく、このセクトは悪魔の個人的な支配下にある新しい異端であり、彼らは悪魔を崇拜し、契約を結ぶことによって害悪魔術を使う、とされた。

¹¹ クラーメルの多くの魔女裁判での敗北も、このような考えによるものであると推察できる。教父や司教法令集に見ることができるキリスト教の伝統的な魔女や魔術への態度である。

¹² 世界各地に見られる民間信仰の一つで有り、相手を一瞥することによって呪いをかけることができると信じられている。ヨーロッパでは地中海沿岸が最も邪視信仰が強い。「邪視」(evil eye, der böse Blick)という言葉は南方熊楠による訳語であり、彼はその概念を日本に紹介した。

問2; 害悪魔術を行うために常に悪魔は魔女と結託しなければならず、または一方だけで他方なしで、(つまり悪魔だけで魔女なしで、魔女だけで悪魔なしで)そのような効力【魔術】を生じさせることができると主張することは正統信仰の立場であるかどうか。

【議論1】まず、悪魔が魔術師なしでそれら【害悪魔術】を作用し得ることを証明する¹³。人が信じているように、目に見えて起こるあらゆることは天空の下層の諸力によって起こり得る。しかし、あらゆる肉体的な害は、目に見えないのではなく、むしろ知覚され得るのである。それ故に、肉体的な害は悪魔によってもたらされ得る。

【議論2】それに加えて聖書によれば、悪魔はヨブに向けられた厄災¹⁴(火が天から落ち、落雷が家畜の群れと奴隷の命を奪い去り、そして家を破壊した突風が子供を死なせた)を単独で、魔術師と協力することなく、ただ神の許可によってのみ行った。従って、魔術師や魔女に責任を負わせる他のことにおいてもそうなのである。またこれは、悪魔が殺した処女サラの7人の夫¹⁵にも明らかに当てはまる。

【議論3】またさらに、常に「より下位の力」にとって「より上位」の力の協力が無くとも可能なことは、「より上位」の力にとっては「より下位の力」【の協力】が無くとも可能である。下位の力は雹を起こし、上位の協力なしで病気を引き起こすことができる。それはつまりアルベルトゥス・マグヌスが、決まった方法を用いて腐らせたセージを泉の中に放り込んだ時、不思議な嵐を呼び起こすことができる、と述べている¹⁶【ことに当てはまる】。

【議論4】また悪魔は害悪魔術を用いないのではなく、魔女の破滅のために害悪魔術を欲する—これは悪魔に必要故である¹⁷—と主張することもできるだろう。しかしながら、アリストテレスによれば¹⁸、悪意は自由意志である。彼【アリストテレス】が自著の中で証明したように、誰も望むことなく故意に悪事を行わない。それは正しくない。そして、誰も、望むことなく猥褻行為をしない。それはふしだらである。立法者は、故意に悪事を犯した故に悪人たちを罰する。しかし、もし悪魔が魔女の協力を得て何かを成し遂げたのなら、それは悪魔が道具を扱うように【魔女を】扱ったのである。そして、道具は扱っている支配者に左右され、自らの意志に従って行動することはないので、共に作用していても、道具に行為の責任を負わせられないし、それ故その【道具の】行為は罰せられるべきではない。

しかしそれに反して、悪魔は魔術師や魔女【の協力なしで】地上で何かを引き起こすことはできないと述べる。まず第一に生殖についてである:あらゆる運動は接触によって生じる。そして、肉体への悪魔の接触は何もないので、【また】悪魔は肉体と無関係なので、それ故悪魔には接触によって害を与えるために、力を注ぎ込む道具が必要なのだ。

【議論5】従って、悪魔の働きのなしに魔術が起こり得るであろうことは、ガラテアの信徒への手紙¹⁹やその注解によって証明される。「ああ、愚かなガラテア人たち、誰がお前たちを惑わしたの

¹³ アウグスティヌス、『83の命題』、79,1-3

¹⁴ ヨブ記;1,12-19

¹⁵ トビト記;6,14-16

¹⁶ 出典不明。

¹⁷ クラームルによれば、悪魔は神に対抗する軍団を作るために墮落した魂を集めている。

¹⁸ アリストテレス、『ニコマコス倫理学』、3,1

¹⁹ ガラテアの信徒への手紙;3,1

か。お前たちは真実に気付いていないのか。」注解「多くの人間が刺された目を持ち、彼らは肉眼によって他の者、大抵の場合子供を毒する。」これについてはアヴィケンナも自身の著書²⁰で述べている。「邪視が肉体に影響を及ぼすのと同様に、ある魂はしばしばある他人の肉体に影響を及ぼす。」また同様の意見をアルガゼル²¹も呈示している。

またアヴィケンナは、もし想像力が拘束力を持たないのなら、視線の交わりなしで想像力は他人の肉体を変化させ得るかもしれないと考え、そこで彼は想像力の【概念を】非常に広範に拡大した。そしてここで我々は、一般的な感覚や空想や判断のように他の内在する知覚の力と区別するような感覚において想像力を理解するのではなく、想像力はあらゆる力を包括していると理解する。しかし想像力は、それと結びついている肉体、つまり想像力が内在している肉体を変化させることができるということは確かに真実である。例えば次のような場合がある。ある人は道の真ん中に置いてある角材の上を歩くことができる。しかし、その角材が深い川の上に置かれていたのなら、その人はその上を歩くことができないだろう。というのも、その人の魂の中に刻み込まれた落下の想像力がとても鮮やかに思い起こされるからであり、四肢や手足の力がその想像力に従うからである。そして四肢や手足の力は、まっすぐに角材の上を行くという【落下の想像とは】反対の想像には従わない。その点において、まず先に他人の肉体ではなく自身の肉体が変化させられる限り、この変化は邪視と一致する。我々はこの変化について話しているのである。

【議論6】さらに、他の生きている肉体の魂が仲介役として作用することによって、ある生きている肉体によってそのような変化が引き起こされると言われるのなら、それに対して、殺人者が居合わせると殺された者の傷口から血が流れ、また肉体は魂の力が無くても不思議な作用を引き起こし得ると反証する。同様に、生きている人間が殺された人間の死体の側を通り過ぎる時、もし気付かなかったとしても、恐怖に襲われる。

【議論7】そして自然の事柄にはその原因が人間によって名付けられ得ない隠された力がある。例えば、鉄は磁石を引き寄せるのであり、その他のこともアウグスティヌスが『神の国』²²で多く列挙している。女性は、他人の肉体に変化を引き起こすために悪魔の助けを借りずにある種の方法を用いる。そしてこれらのことが我々の理解を超えているからといって、我々は全力で魔術師や魔女の【が利用する】自然の力【理解を超えている力】を認めず、排除することによって、それを悪魔のせいにするべきではない。

【議論8】また魔術師は様々な像や媒体を利用する。彼らは時々それを玄関の敷居の下、動物や人間が集まるある場所に置く。その後、動物や人間は魔術をかけられ時折死ぬこともある。しかしその種の作用は天体の影響を受けている一方、幻想によって引き起こされ得ることが証明される。自然の事柄が天体に従属しているように、人工の事柄もまたそうである【天体に従属している】。また、自然な肉体が秘密の力を受け取るのと同じく人工の【肉体】もそうである。そこから、魔術師【や魔女】の行為はそれら【天体】の影響によって生じさせ得られ、悪魔によってではないことが明らかになる。

²⁰ イブン・スィナー。ラテン語;アヴィケンナ、『de anima』、4,4,65

²¹ アブー・ハーミド・ムハンマド・ブン・ムハンマド・ガザーリー。ヨーロッパではアルガゼルの名で知られる。『physik』、5,9

²² アウグスティヌス、『神の国』、21,4

【議論9】そして、自然の力から不思議で驚愕に値する働きが起こり得るように、真実の奇跡が天体の影響が作用する中にある自然の力によって【引き起こされ得るのならば】、このことは証明される。グレゴリウスが『対話』の中²³で次のように述べている。「聖人はある時は祈りによって、またある時はその力によって奇跡を起こす。」両者の例を挙げよう。ペトロは死んだタビタを祈りによって蘇らせた²⁴。ペトロは、祈りによってではなく呪詛によって嘘つきなアナニアとサファイラに恐れによる死を引き渡した²⁵。すなわち、人間は自身の魂の力によって、他人の肉体的物質を変化させることができるし、健康な状態から病気に、またその反対に変化させることもできるのである。

【議論10】さらに、人間の肉体は他の下位の状態にある肉体よりも価値がある。人間の魂から印象を受け取ることによって、怒りや恐怖を感じた時に現れるように、人間の肉体には暑さや寒さといった変化が生じる。そればかりかこの変化は時折病気や死をもたらす。それ故それだけに一層魂はその力によって肉体的物質を変化させるのである。

しかしそれに反して、上述したように、精神的な物質は他の要因の助力なしでは、何かあるものの姿を刻印することができない。それ故、アウグスティヌスも上述の著作の中²⁶で、「目に見えるものの物質は随ちた天使【悪魔】の命令に従うのではなく、神のみ【に従うのである。】」と述べている。それ故、人間だけでは自然の力から害悪魔術を引き起こすことは尚更無理なのである。

答えを述べる。このテーマにおいて、魔女を弁護したり、ただ単に悪魔を非難したり、彼らの行為をある種の自然の変化に帰するという誤りを犯す人々は少なくないので、まず初めにそれらの誤りを、魔術師を詳細に記述することによって示す。これについてインドールは『語源学』²⁷の中で、「彼らは彼らの悪行の言語道断さ故に、つまりその他のあらゆる犯罪者よりも悪行を行っているが故に'malefici」と呼ばれる。」と述べている。それ故彼【インドール】は付け加えている。「彼ら【魔術師や魔女】は、確かに悪魔の助けを借りて雹や嵐を引き起こすため【自然の】要素を混乱させる。」また彼【インドール】は「彼らは【魔術師や魔女】は人間の精神を混乱させる。」とも述べている。【精神の混乱とは】憎しみや手に負えない愛情といった狂気と理解してもらいたい。同様に彼【インドール】は「そして、数滴の毒を用いずにただ呪文の強力さによって彼ら【魔術師と魔女】は魂を滅ぼす。」とも付け加えている。グラティアヌス教令集²⁸にも同様のことが引き合いに出されている。そして、『神の国』²⁹におけるアウグスティヌスの言葉がある。そこでは、妖術師や魔術師と呼ばれる者について説明されている。妖術師は一般的に魔術師と呼ばれる。それは彼らの犯罪の重さ故にそう呼ばれるのである。彼ら【魔術師たち】は、神の許可を携えながら、【自然の】要素を攪乱させ、信仰心の弱い人間の心の均衡を失わせ、数滴の毒を用いずにただ呪文の強力さによって人間を破滅させる、そういった者達なのである。それ故ルカヌス³⁰は、「魂は、強い毒を飲むことによって汚されるのではなく、呪いによって

²³ グレゴリウス1世(大グレゴリウス)、『対話』(dialogi)、2,30,3

²⁴ 使徒言行録;9,36-42

²⁵ 使徒言行録;5,1-11

²⁶ アウグスティヌス、『神の国』、20,4、『三位一体論』3,8

²⁷ インドール、『語源学』、8,9,9

²⁸ グラティアヌス教令集、2,26,5,14

²⁹ アウグスティヌス、『神の国』、引用箇所不明

³⁰ マルクス・アンナエウス・ルカヌス、『内乱』(de bello civili)、6,457

徹底的に滅ぼされるのである。」と述べている。というのも、彼らは悪魔を呼び出した後、悪の技で彼らの敵を破滅させるまで、長く魔術的作用を続けようとするからである。このことから、そのような働き【魔術を使う】の際、悪魔は常に魔術師や魔女と一緒にいるということが明らかである。

2つ目、我々はすなわち災いを4種類の作用に類別できる。つまり、「役に立つ」「有害な」「害悪魔術的」「自然な」である。役に立つ【作用】とは、善い天使の働きによってもたらされ、有害な【災いは】悪い天使の働きによってもたらされる。つまり、モーセは善い天使の助けを借りてエジプトに10の災いを与えたが、【ファラオの】魔術師は悪い天使によって単に9つの災い³¹をもたらしただけである³²。そして人口調査に関するダビデの罪故の3日間の疫病³³、センナケリブ王の軍隊の陣営で一晩で打ち負かされた10万5千人³⁴、これら全ては主の御使い、つまり主を崇め賞賛する善い【天使】によって生じたのである。しかし、悪い天使による巧妙さが示されている聖書において有害な作用とは、荒野において³⁵民に向けられるものである。害悪魔術の作用とは、悪魔が魔術師や妖術師を使って影響を及ぼした時、そう呼ばれるのである。そして自然の作用とは天体の影響によるものであり、我々の嘆きの谷³⁶における死すべき運命、不作、雹といった形で引き起こされる。そしてこれらの作用の間には大きな違いがある。またもしヨブが害悪魔術によってではなく、悪魔によって有害な災いに襲われたのなら、当面の問題とは関係がない。

しかし、魔女の擁護者—彼らは常に霞の中で空疎な言葉を突き回し、決して真実の核心に到達しない—によってこのテーマが偏狭な批判に晒されるように、誰かがこれについて了見が狭い主張をしつこくするのなら、自問すべきである。何故ヨブは害悪魔術の行為ではなく、悪魔による有害な魔術に見舞われたのか。これに対して、ヨブは魔術師や魔女の仲介なくただ悪魔のせい【災いに】に見舞われたという偏狭な答えを出すこともできるだろう。というのもこの種の迷信は当時はまだ存在していなかったのだから。あるいは、もし【当時】この種の迷信があったとしても、それにもかかわらず、神の摂理は、世界が神の誉れを知らしめるために悪魔の力を望んだのであり、それ(神の摂理)によって人間は追手(悪魔)から身を守ることができたのである。従って、悪魔は神の許可を得なければ何も影響を及ぼすことができない。

最初の迷信が発生した時に関して、—私【クラーメル】は最初の迷信は悪魔への嘆願であり、偶像崇拜ではないと理解している—ヴィンケンティウスは多くの学者の引用を用いながら、魔術や占星術の創始者はゾロアスターであり、彼は自称ノアの息子ハムの息子であると述べている³⁷。『神の国』によれば³⁸、彼は(ゾロアスター)は生まれた時笑っていた唯一の者であり、そんなことは悪魔が手を貸さなければ起こり得ないのである。彼が王の時、彼はバルの息子のニヌスに征服された。ニヌスはニネヴェの街を建設し、その上ニヌスのもとでアブラハムの時代にアッシリア帝国が始まった。

³¹ 実際は、ファラオの魔術師が行ったのは「水を血に変える災い」と「国中をカエルで覆う災い」の2つである。

³² 出エジプト記;7,14-12,1

³³ サムエル記(下);24,1-25

³⁴ 列王記(下);19,35

³⁵ 出エジプト記;32,25、民数記;16,20-30

³⁶ 不幸な現世の意。

³⁷ ヴァンサン・ド・ボーヴェ、『歴史の鑑』、1,101

³⁸ アウグスティヌス、『神の国』、21,14

このニヌスは父親への異常な愛情から死んだ父親の立像を建てさせ、この像を頼りにした悪人たちは、各々【の罪に】当然与えられるべき罰から自由になる程であった。それ以来人間は像を神のように崇め始めた。このようなことは第一の世代³⁹の後初めて【起こった】。というも、トマス・アクイナスが述べているように⁴⁰、第一の世代では、まだ世界の創造の記憶が新しかったため偶像崇拜は存在しなかったからである。もっとも、これ【偶像崇拜】は人間に火を崇拜することを強制したニムロデ⁴¹によって始まった。そして、第二の世代において偶像崇拜は始まった。これは迷信の第一の種類であり、第二【の種類】は予言、第三【の種類】は星座の観察である。魔術師の儀式は、悪魔への明確な嘆願によって生じる第二の迷信に帰せられる。これについては3種類あり、黒魔術・惑星の勉強(というよりはむしろ占星術)・夢占いである。

私【クラーメル】はここで、敬虔な読者が有害な技というのは突然ではなく、時代と共に現れてきたということ、そしてヨブの時代に魔女は存在しなかったことを認識するために、このようなことを説明しているのである。グレゴリウス1世が『ヨブ記注解』で次のように述べている⁴²。聖人の知識が時間と共に根付いたように、悪魔の有害な技も時間と共に根付いた。今やどれ程地上が主の知識で満たされていようとも⁴³、世界はその夕べにおいて終焉に向かっており、人間の悪意は増大し、愛は凍りつき、魔術師の不法は考えられない程多く存在しているのである。しかしプロアスター自身はその行為に熱心であり、それどころか星の観察に執心していたので、悪魔によって落ちてくる火によって殺された。これについては上述した。

しかし、魔術師が害悪魔術を持ち込むために悪魔と力を合わせた時代については、すでに上述したように「出エジプト記」の中に見出すことができる⁴⁴。エジプトを襲う災いの際に、モーセが善い天使の助けによって多くの不思議なことをもたらしたように、ファラオの魔術師は悪魔の助けによってそれらをもたらした。

それ故、すなわち害悪魔術を成し遂げるためには、たとえそれが有害な結果ではなかったとしても、常に魔術師は悪魔と一緒にいなければならないということが真実の正統信仰だと結論付けられる。

【反証1】それ故議論に対する答えは明らかである。すなわち、天体の影響の結果、人間や家畜や穀物に対して目に見えて認識できる有害な作用は、しかしまたしばしば神の許しを得て悪魔によって行われるのであるという最初の議論に関しては否定されない。つまり、アウグスティヌスは『神の国』の中で、「神によって許可されている限り、火や大気は悪魔に従属している。」⁴⁵と述べている。また、悪い天使によってもたらされる作用に関する言葉についての詩篇注解からも明らかである。「神は悪い天使を使って罰することもある。」⁴⁶

³⁹ 第一の世代とはアダムからノアまで、第二の世代とはノアからアブラハムまでを指す。

⁴⁰ トマス・アクイナス、『神学大全』、2,2,94,4,2

⁴¹ 創世記; 10,8-12

⁴² グレゴリウス1世、『ヨブ記注解』、34,1

⁴³ イザヤ書; 11,9

⁴⁴ 出エジプト記; 7,14-12,1

⁴⁵ 実際は、アウグスティヌス、『三位一体論』、3,8からの引用である。

⁴⁶ 詩篇; 78,49

【反証2】このこと【反証1】及び魔術の開始についての発言から、またヨブについての第二の【議論】は明らかである。

【反証3】第3の議論(泉の中に投げ入れられたセージ)については、悪魔の助けなしで生じたが、しかし天体の影響なしでは生じ得なかったとすることができる。しかし我々は害悪魔術の作用について述べており、それ故これはここで問題となっていること【悪魔と魔女がもたらす害悪魔術の作用】とは何の関係もない。

【反証4】悪魔は魔術師たちの破滅のためだけに彼らを利用するという第4の議論は真実であると言うことができる。そして、もし魔術師は自らの意志によってではなく、主たる要因の意志【悪魔の意志】によって動かされているのだから、彼らを罰するべきではないと反証されるのなら、それについては、彼らは魂を持った自由に動ける道具であると答えることができる。彼らはまた、我々が彼らの自白から見て取れるように—そして私は火刑にされた女性たちについて話しているのである—、悪魔との明確な契約に同意した後はもはや彼らに自由はないであろうし、大抵の魔術師の場合、強制的に一緒に働かされるのである。彼らが悪魔の打撃を避けようとしても、彼らは彼らが自らの意志で悪魔に臣従すると誓った最初の約束によって拘束されている状態なのである。

害悪魔術の作用は悪魔の助けなしで老女によって行われ得るということが証明されるその他の議論について⁴⁷、ある部分から全体を結論付けることは理性に反するというべきであろう。そして聖書には、魔術や老女の邪視についての話題が書いてある箇所以外ではそのようなこと【について述べられている箇所】を見つけないことができないので、常にそのようなことが生じるに違いないと結論付けることはできないのである。その上、「ガラテヤ書注解」故に悪魔の助けなしでそのような邪視が起こり得るかどうかは疑わしい。そして厳密に言えば、確かに邪視には3つの方法があると明らかにされているが故【に疑わしい】:つまり、1つ目は、神の直接の仲介や天使の働きによって妨げられない場合、魔術的な技によって生じ、また悪魔の助けを借りて生じ得る、欺瞞の罪である。

2つ目は、「誰が私たちの目を眩ませたのか? つまり誰が憎しみに私たちを打ったのか?」⁴⁸と使徒が言っているような妬みである。3つ目は、それらの憎しみによって、邪視を見た人間の目を通して、誰かの肉体を悪へと変化させることである。この魔術について、アヴィケンナとアルガゼルが述べていることに従い、学者たちは一致した意見を述べている。というのも、トマス・アクイナスが『神学大全』の中でこの性質の邪視を説明しているからである⁴⁹。トマスは、魂の強い想像力によって精神は、精神と結び付けられた肉体と共に変化すると言っているのである。精神のこの変化は多くの場合、目によって引き起こされる。目には鋭敏な精神が届くのである。つまり目は、ある決められた距離まで、直接隣接する空気を汚染するのである。アリストテレスが自書の中で言っているように⁵⁰、鏡が新しく輝いているのなら、鏡は月経中の女性によって汚されるのである。それ故、誰かの魂が悪へと激しく刺激されたのなら、—多くの場合老女に起こるのだが—、これは言及した技と方法から生じた作用なのである。その視線は毒であり害であり、大抵の場合優しく感受性の強い男の子たちに対して【向けられるの】である。しかしながら、

⁴⁷ ここで一旦反証は中断され、邪視の話に変わる。反証5の直前まで続く。

⁴⁸ ガラテヤの信徒への手紙; 3, 1

⁴⁹ トマス・アクイナス、『神学大全』、1.117.3

⁵⁰ アリストテレス、『眠りと覚醒について』、2

彼【アリストテレス】は、神の許可や隠された出来事から、占いをする女性が契約を結んだ悪魔の悪意が共に作用する可能性もあると付け加えている。

しかし答えのさらなる理解のために、いくつかの疑わしい質問が投げかけられ、その解明から真実がさらに明らかになるだろう。つまりまず、上述の繰り返しに見えるが、精神の本質は、他の要因の協力がなければ肉体を何か自然の形に変化させることはできない。同様にこれは魂の中の強い想像力にはより少ししか作用し得ない。それに加えて、大学で、特にパリにおいて非難された論文がある。そこには祈祷師が一瞥でラクダを穴に投げ入れた【と書かれている】。より高度な判断力が、劣る判断力に影響を及ぼすように、精神的な魂は他の精神的な魂に影響を及ぼす故であり、感じやすい魂もそうなのである【影響を及ぼす】。人がそれを明白に理解し、技や変化と関連していたのなら、見せかけの物質は精神の本質に従う、と主張する同様に非難された論文がある。すでに明らかのように、物質は神に従うからである。

この事柄を具体的に述べることによって我々が話している邪視で魔術をかけることが、どのように可能なのか、もしくは不可能なのかが解説される。つまり、人間の自然な魂によって目を介してそのような力【魔術の力】を放出することは、人間には不可能である。そのような力は、自らの肉体の仲介される変化によってもしくは仲介物によって、彼が注視する人間の肉体に害を与えることができない。とりわけ我々は内なる受け取り手が外からの送り手では全くないという、(目についての)さらなる流布されている意見を目にする。意志を通して、人間の魂の自然な力によって変化を成し遂げることは人間が目の中に変化を想像したとしても人間には不可能である。変化は、媒介の仲介される変化によって、つまり空気によって、注視する人間の肉体の性質を好きなように変化させられ得るのである。上述のこの両方の方法によって人間は他の人間に魔法をかけることはできないので、人間の魂の力によるそのような支配力は人間には本来備わっていないのである。そのような理由で、悪魔の力によって起こされるであろう魔術師の行為を打ち負かすために、害悪魔術の作用が何か自然の力から引き起こされると証明しようとすることは非現実的なのである。また、上述した2つの項目のように邪視の魔術は2つの形において退けられる。

しかしまた、上述のように、それがどのように可能なのがここではさらに明らかにされるだろう。つまり、男であれ女であれ、彼らは誰か少年を見た時、視線や想像力もしくは知覚される感情を用いて少年の心を動かす。そしてそれは知覚される感情が肉体的変化と結び付けられ、また目はとても敏感なので、目は簡単に印象を受け取り、内なる興奮によって悪意に影響された性質に変化させられ、多くの場合ある種の想像と共に作用し、その(想像の)印象はすぐに目に現れるからである。また同様にその(目の)繊細さ故に、また空想の器官と共に個々の感覚の根底の知覚の近くにある故である。しかし目が何か悪い性質に変化させられるのなら、目は目に近い空気や注視している少年の近くにある空気に至るまでを、良くない精神状態に変化させるということが生じ得る。そして目の近くの空気は時折少年の目を、素質のない要素よりは悪い精神状態に適合する素質のある要素へと変化させ得る。そして、この少年の目の仲介によって他の部分も変化させ得るのである。それ故その少年に消化能力が備わり、四肢が強くなり成長するわけではない。この経験は、明白である。というのも、我々は時折目を患っている人が視線によって彼(目を患っている人)を見た人の目に害を与えることができるということを知っているからである。悪い性質に取り憑かれた目はその間にある空気を感染させ、感染した空気は、病気の目に向けられた目に感染する。その結果、感染は見ている人の目に向けて真っ直ぐに感染するのである。見ている人が、見たり思い描いたりする空想は感染に大いに貢献するのである。彼(目を患っている人)は病気の目によって害を与えるだろう。さらなる明白な例は導き出され得るが、手短にするために省略しよう。

詩篇についての注解がこれと一致する。「お前を恐れる人々は私を見る。」⁵¹は「自然の事柄において明らかなことだが、大きな力は目の中にある。」を意味している。動物への視線は怒りの際に役に立つ。例えば、私たちが出くわす狼はまず私たちの声を奪う。もしくは、バジリスクは先に自分が知覚すると殺すが、先に(自分が)見られると殺される。バジリスクは視線によって人間を殺す。その原因は、視線や肉体の想像力によって毒素が刺激されるからである。その毒素によってまず目が感染させられる。その後毒素はその近くにある空気や空気の一部から人間の近くの空気に至るまでを感染させるのである。人間がこの空気を吸い込んだら、毒に冒され死ぬ。しかし、先にバジリスクが人間によって見られ、その人間がバジリスクを殺したいと思うのなら、人間は自分の周りを鏡で固める。バジリスクはその鏡を見ると、鏡の反射によって空気に感染させられ、その感染した空気がバジリスクまで届くと、死ぬのである。しかし1つ疑問が残る。何故人間は野生の動物の殺人者として死なないのか？ここでは隠された原因を是認する必要がある。このことは偏見や極端な自説を唱えずに論じられる。つまり魔術の作用に関して、我々は我々に維持されている聖人の言葉のみが正統信仰の真実だと推測できる。魔術に関して、今日我々は、魔女は常に悪魔と一緒になければならず、一方だけでは全く達成され得ないと、言う。

論証⁵²。

【反証5】1つ目に関して、邪視の魔術についての答えは明らかである。

【反証6】2つ目(の答え)については、ヴァンケンティウス(強い想像力による殺人者の精神によって傷は影響を受ける)によって論証される⁵³。そのような傷は影響を受けた空気に働きかける。殺人者が通り過ぎたら、血が流れる。何故なら、殺人者が居合わせると、傷の中に閉じ込められた空気が刺激され、この刺激故に血が流れるのである。いくつかのことをさらなる根拠として挙げる。この流血は殺人者が居たことについての土からの嘆きであり、確かに最初の殺人者、カインの呪い故である。これに関し、悪寒については次のことが言える。殺された人間の死体の側を通り過ぎた人間は、彼(側を通った人間)はその人(殺された人・死体)に気が付かなかったとしても悪寒によって身震いさせられる。これは例えわずかな感染であったとしても、感染を魂に伝える一方の精神によって生じる。しかしこのようなことは魔女の陰謀故だと推論されない。このようなこと全ては、すでに述べたように自然の方法で生じ得るからである。

【反証7】3つ目、魔術の利用は人が予言と呼ぶ迷信の二つ目の種類に帰される。しかし、ある種の星の観察の際に迷信的な事柄を利用することは、三つ目の種類に帰される。それ故この議論はここには適さない。結局儀式はある種の予言ではなく悪魔への明確な呼びかけによって行われるのである。そしてこれは様々な方法—霊媒、砂占いあるいは水占いなど—によって生じ得る。『神学大全』を調べて見てほしい⁵⁴。この魔術の予言は、予言が害悪魔術を目論んでいるのなら、予言が害悪魔術の行為の中では高い位置にあるので、様々な判決が予期されるべきである。それ故、我々には隠された事柄を認識できず、そして魔女は、隠されたことに専念しているので、彼らが自然の力から自然の作用を引き起こさせるために自然の事柄を求める

⁵¹ 詩篇; 1,12。

⁵² 邪視の話が終わり本題に戻る。文中では「1つ目」となっているが、邪視の話に入る前からの続きである。従って翻訳は原文のまま訳したが、【議論】と対応するように数字をうった。

⁵³ ヴァンサン・ド・ボーヴェ、『歴史の鑑』、13。

⁵⁴ トマス・アクイナス、『神学大全』、2,2,95,3。

と言われるのなら、これは自明のことながら許され得るだろう。また例え迷信的な方法で—つまりある種の魔術の印や何か知らない名前を刻み込むこと—自然の事柄を利用することを認めるなら、また、彼らがそれらを健康や友情、他の有益なことを手に入れるために、そして苦痛を与えないために、それらを利用するとしても明確な契約なしで、また同様に暗黙の契約なしでは起こらないであろう。そしてその時彼らは不法者という評価を受けるのである。

しかしながらこの行為やこれに似た行為は、迷信の三つ目の種類、つまりすでに述べた印の観察—空虚なもの観察—to 帰される。それ故これは魔術師の異端についての主題に役立たない。この迷信の3つ目の種類は4つの形式に帰されるというのが答えである。というのも、当該の問題は、知識を得たり、幸運や不運について、あるいは御符の力を弱めたり、肉体を良い状態に変化させるために儀式を利用するからである。それ故トマスは『神学大全』の中で、肉体の変化を達成する儀式は許されるかどうか問うている⁵⁵し、「つまり健康へと」と、素晴らしいことを付け加えている。魔術師の儀式はここではなく迷信の二つ目の方法の一部なのである。それ故主題にはなり得ないのである。

【反証8】次に像は、交霊術と占星術の2つの印の観察において現れるという4つ目の議論に答えよう。そして交霊術と占星術の間には次のような差異がある。交霊術の場合、悪魔と結んだ明確な契約⁵⁶故に常に悪魔への明確な呼びかけが生じる。**【これについては】**言及された問の2つ目の議論の答えを調べてもらいたい⁵⁷。しかし占星術の場合、暗黙の契約が問題であり、それ故呼びかけが問題なのではない。おそらく書き記す象徴の印のようなものや魔術の印は存在するが。そして反対に交霊術の印象は、天体のある種の影響や印象を受け取るために、もしくは指輪や石やその他の価値のある物質といったある種の象徴や魔術の印を与える事によってある種の星位のもとでなされるか、もしくは星位の観察なしに簡単に星位が作り出される。しかし害悪魔術を行うための通常要素に違いはない。いつどこでその位置が置かれるのかに従って。ここでは形作られた物と共にこの作用について話しているのであって、他の作用に関してではない。それ故この議論は問題ではない。

同様に結局、像が人工物である限り、言及された迷信的な像に効果はない。そして天体の影響によって自然の力を持っているのなら、トマスを調べてもらいたい。彼は、像を用いることは常に許可されていないと述べている⁵⁸。しかし魔女の形象は自然の能力なしで作用を作り上げる。形象が実現のためにすぐにやってくるように、魔女はただ悪魔の命令でそれを置き、使用する。これは神に対する大いなる侮辱故に生じる。神は非常に怒ってはいるが、恥ずべき行為への復讐のため悪を許しているのである。それ故、それは聖なる年に生じるように調整されている。

【反証9】5つ目の議論については、グレゴリウスがそこで自然の力ではなく恩寵の力であると考えていると言うことができる。それ故彼はそこで付け加えているのである。「ヨハネが言うように⁵⁹、これらの息子たちは神の力の中にある。彼らが神の力によって不思議なことを行った時何が不思議なのか？」

⁵⁵ トマス・アクイナス、『神学大全』、2, 2, 96, 2。

⁵⁶ トマス・アクイナス、『神学大全』、2,2,96,2。

⁵⁷ トマス・アクイナス、『神学大全』、2,2,96,2,2。

⁵⁸ トマス・アクイナス、『神学大全』、2,2,96,2。

⁵⁹ ヨハネによる福音書;1,12。

【反証10】最後の議論に関しては、比較は有効ではないと言える。というのも、自分の体と結びついた魂の働きは、自分のものであり、他人の体が結びついたその魂の働きはその人のものだからである。魂は、その魂の形として肉体と一体化されるので、また知覚し得る刺激は肉体のいくつかの器官のもとにあるので、それ故、知覚され得る要因は、暑さや寒さ、時には死といった肉体的な変化のもと人間の魂から刺激され得るのである。邪視の箇所ですべて述べたように、人間の魂の印象は、外的な肉体の変化のために、肉体自身の変化も用いることによって以外は十分ではない。それ故、魔術師は害悪魔術を自然の力からではなく悪魔の助けによって成し遂げるのである。そして悪魔自身は、トゲ、骨、髪の毛、木片、鉄といった他の物質を利用して害悪魔術を成し遂げるのである。これについては以下で説明している⁶⁰。

さて、教皇教書⁶¹の霊的な言葉を出発点として、魔術師の危険さと彼らの行いが増えてきていることについて話そう。まずは魔女自身について、次に魔女の働きについて【述べる】。ここで、このようなこと【害悪魔術】を遂行するためには3つのことが一緒に作用しなければならないと付け加えなければならないだろう。つまり、悪魔・魔女・神の許可である。グラティアヌス教令集⁶²やアウグスティヌス⁶³が言っているように人間と悪魔の災いに満ちた親交の結果、この迷信的な虚偽が発生し、それと共にこの有害な結びつきからこの異端信仰の発生や増大が生じたのである。これは他の事柄からも明らかである。というのも強調しておきたいのだが、魔女の異端は、悪魔との明確な契約によってのみではなく、自由意志によって結ばれた契約により気が狂ったように神や神の被造物への罵詈雑言や毀損に執着している点においてのみ他の異端と区別されるわけではない。しかしながら他のあらゆる異端は、彼らは信じることの困難さ故に悪意を持って種を撒く人⁶⁴の教唆で誤った教えと結びついてはいるが、悪魔との暗黙のもしくは明確な結ばれた契約を決して利用しない。むしろ魔女の異端は有害な迷信的な技と魔術師の異端が予言のあらゆる技によってかなりの悪意を有している点において区別される。その結果彼らは、すでに述べたように「行いが間違った人」だとか「信仰について誤って考えている」と呼ばれるのである。おそらく魔女の異端はその教義を強固にするために4つのことを行わなければならないと【我々は】気付かなければならない。つまり、1、冒瀆的な言葉でキリスト教信仰を全体的にもしくは部分的に否定すること、2、肉体と魂を(悪魔に)捧げること、3、まだ洗礼を受けていない子供を悪魔に捧げること、4、インクブスやスクブスとの肉体関係によって恥ずべき所業をすることである。

ああ、もし全てのことが真実から遠く離れており、でっち上げられたものであり、少なくとも教会が伝染の大きな害に対し抵抗力があったのなら！しかし教書による教皇座の決定も、また魔女の告白や犯された悪行から確信している教訓としての経験もその願いと対立しており、その結果私たちは自身の救済を危険に晒すことなしで魔女に対する異端審問を見捨てることはできない。

それ故、魔女の起源と有害な増大が扱われなければならないのである。これは厄介な主題であるが故に、かなりの慎重さを持って執筆に関する一つ一つが吟味されなければならない。その結果、理性と一致すること、聖書の伝統に反していると考えられないことが認められるのであ

⁶⁰ この議論に関しては第2部問1で詳細に述べている。

⁶¹ インノケンティウス8世「Summis desiderated affectibus」(限りない愛情を持って要請する)

⁶² グラティアヌス教令集、2,33, 1,4

⁶³ アウグスティヌス、『キリスト教の教え』、2,23

⁶⁴ 悪魔。

る。そして魔女の増加に貢献するあらゆる行動の中でもとりわけ2つのこと—つまり、インクス・スクブスと子供の有害な引き渡し—が共に作用しあっているので、我々はこれらを別個に扱う。そして厳密に言うと、まず初めに悪魔、次に魔術師と魔女、最後に神の許可が議題になるだろう。悪魔は知性と意志によって、また他のものよりもむしろ星位のもつで動く。というのも、また後継者の生育のために、悪魔によって観察された星位が調査されなければならないからである。とりわけ3つのことが調査される。1つ目は、この異端が遺伝することによりインクスやスクブスといった悪魔によって広められ得るのかどうか。2つ目は、人間の行動の原因である天体との関係によって、魔女の働きが強められ得るのかどうか。3つ目は、悪魔に子供を捧げるという有害な生贄によってこの異端が増加しているのかどうかである。魔女の働きについての調査の継続に有用なので、2つ目と3つ目の質問の中には天体の影響に関する2つの主題が扱われている⁶⁵。1つ目に関しては3つの難しい問題がある。1つ目はインクスとスクブスに関する一般的なこと⁶⁶。2つ目は、他の悪魔によってそのような行為が行われるかどうか⁶⁷。3つ目は、悪魔に従う魔女についての詳細である⁶⁸。

付録

弁明書(apologia)

崩壊しつつある時代の終末の厄災の中で、非常に残念なことであるが、我々はあらゆる場所において、その厄災を経験し、読む。

とりわけ、古に昇る太陽⁶⁹は、—彼は、墮天による永遠の劫罰によって荒れ狂っているのであるが—、当初から教会を、—新しく昇る太陽⁷⁰、つまり人間イエス・キリストが自身の血を流すことによって教会を実りあるものにしたのだが—、誤った教えを蔓延させることによって毒することを止めない。しかし、それにもかかわらず、特に世界の夕べがその終焉に傾いており、人間の悪意が増大している今日において、悪魔はこれを【教会を毒すること】試みているのである。というのも悪魔は、ヨハネが聖書の中で証言しているように⁷¹、自分にはほとんど時間が残されていないことを、怒りでいっぱいになりながら自覚しているからである。故に悪魔は、主の国⁷²においてある異常な異端の邪悪さを引き起こし蔓延させているのである。そして、その異端は—私は魔女と呼ぶが—特定の性【女性性】によって特徴付けられ、我々はその性の中で異端が蔓延しているのを見るのである。企てられた陰謀は無数にあり、とりわけ、考え得る恐ろしいこと、

⁶⁵ 天体とその影響に関しては『鉄槌』第1部問5に述べられてはいるが、2つ目と3つ目の中の問題が何を指しているのかはよく分からない。

⁶⁶ 『鉄槌』第1部問3。

⁶⁷ 『鉄槌』第1部問4。

⁶⁸ 『鉄槌』第1部問7-11。

⁶⁹ 悪魔。イザヤ書;14,12「ああ、お前は天から落ちた明けの明星、曙の子よ。お前は地に投げ落とされたもろもろの国を倒した者よ。」

⁷⁰ ルカによる福音書;1,78「これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、」

⁷¹ ヨハネの黙示録;12,12「それゆえに、天とその中に住む者たちよ、大いに喜べ。しかし、地と海よ、おまえたちは災いである。悪魔が、自分の時の短いのを知り、激しい怒りをもって、おまえたちのところに下ってきたからである。」

⁷² この世。

神の目の内で非常に忌まわしいこと、キリスト教を信仰する全ての者にとって憎むべきこと、そのようなことを行うのである。

彼女(魔女)たちは、地獄や死の契約に従って、彼女たちの忌まわしい欲求を満たすために、最も汚らわしい奴隷の身分を甘受しているのである。さらに魔女は、神の許可や悪魔との協力によって、人間や家畜や地上の木の実に対して日常的な苦難を与えるのである。

この厄災を鑑みて、我々異端審問官、つまりヤーコプ・シュプレングエルと異端の有害さを根絶するために共に教皇座によって委任されたとても親愛なる仲間⁷³は、ドミニコ会に所属し奮闘している神学教授の間ではとても卑しい身分ではあるが、それにもかかわらず敬虔さと哀しみの心で有益な救済法として、どのような救済や慰めが人々に与えられるべきかを考えた。

その際、全ての者に豊富に与えた方⁷⁴、そして祭壇から火鉢で燃えている炭を取り、不完全な者の唇をその炭で触れ、浄化した⁷⁵方⁷⁶、その方の蜜が流れ出るような寛大さを堅く確信して、我々は望ましい結果をもたらすために、他の方法よりもこの我々の作品を一身に引き受けること⁷⁷が適当であろうという考えに至った。

しかし、人間の仕事において災難が付随しない有益さや容認は決して起こらない【何をしても非難されないことは有り得ない】。そしてたとえ、我々の乏しい才能が他人の誤ったヤスリによって徹底的に削り取られなかったとしても、我々の乏しい才能では真実に到達し得ない。それ故、誰かが、我々の作品の新しさ故に我々の虚偽を責めなければならないと考えるのならば、我々は泰然としてその非難の中に身を委ねよう。しかし、この作品が新しく同時に古いということ、また短くはあるが同時に長く詳細であることを彼らに知らしめよう。確かに、これは内容や権威においては古いが、その断片を分類し、纏め上げたという点においては新しいものである。つまり、非常に多くの作家たちの著書を纏めたという点においては短いが、しかしながら広範囲な主題や魔女の計り知れない邪悪さを扱ったという点においては長いのである。我々の僅かな知識や事実以外から付け加えられたものは何もないので、我々はこのことを尊大な態度で話しているのではなく、他の作家の作品をけなしているのでもない、また、我々の作品を鼻にかけたり自惚れて賞賛したりしているのでもない。そしてそれ故に、この作品は我々の作品ではなく、概してその個々の部分を纏め上げたその著者たちの作品であるとみなされるべきである。

まさにこのことから、我々は詩を書き、高尚な理論を立てようとしたわけではない。そうではなく我々は、至高な三位一体及び不可分なる唯一者の誉のために、3つの主題(つまり始まり、発展及び終わり)を超えて、引用者の手順を用いて、【この作品に】取り組んだのである。そして『魔女への鉄槌』と名付けた。我々は仲間⁷⁸のためにまた、最も厳正なる裁判所⁷⁹に属する人々が【裁判を】実行するためにこの作品の編集を引き受けなのである、何故なら彼ら(世俗の

⁷³ Heinrich Kramer(Institoris)。自分自身のことをシュプレングエルの仲間と称している。シュプレングエルとクラーメルの関係については本論の脚注2を参照されたい。

⁷⁴ 神。

⁷⁵ イザヤ書;6,6-7「するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。彼はわたしの口に火を触れさせて言った。「見よ、これがあなたの唇に触れたのであなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」」

⁷⁶ イザヤ書ではセラフィム(熾天使)の1人によって浄化されたとあるが、ここでは神になっている。おそらくセラフィムが神の意思によって行ったと解釈できる。

⁷⁷ 『鉄槌』を執筆すること。

⁷⁸ 聖職者。

⁷⁹ 世俗裁判所。

裁判官たち)は神によって悪人を罰し、善人を賞賛するための権限を与えられているからである。
あらゆる栄光と誉れは永遠に神のもとに！